

社 会 科

泊 和 寿
澤 田 兼 祐

1 社会科における「考える子」

小学校社会科の目標は、公民的資質の基礎を養うことである。そのために、社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育てるのである。

社会生活については、生活経験や体験的な活動を生かして学習を進める。身近な施設の見学や資料から多くの気づきを出し合う。出し合った気づきから自分の考えを比べ、共通点や相違点を見出していく。そうする中で、複数の事実に通ずる目的を見出したり、関連する事実を関係付けてまとめ、先人たちが生み出した工夫に気付こうとしたりできる。身近な事実から明確に示されていない根拠を調べたり、事実が示す時代より前の時代の様子と比べ変化を見出したりする学習活動により、より深く社会生活について理解し、同時に自分とのかかわりを意識し明確にしていくことが社会科における「考える」活動であると考えられる。また、このような学習で、子どもは集団での学習が個の学びから成り立ち、同時に個の学びでは得られない事実を得ることができたという満足感を感じることができる。またその学習が、我が国の在りようをとらえさせ、これからの社会の形成者の一員としての自覚の形成を促すことにつながると考える。

よって、社会科における「考える子」を次のようにとらえる。

体験的・問題解決的な学習を通して 考える意欲と質を高めながら 地域社会や我が国の国土・産業・歴史などに対する理解と愛情を育み 自分とのかかわりを見出していく子

2 学ぶ楽しさを味わう社会科の授業

子どもは資料や生活体験などから事象を知る。それらの事象について自分の言葉で表現するとき、自らの下した判断に基づいて話す。課題を解決するために必要な情報であるとして判断したのか、その根拠を付け加えて話すということである。話し手である児童が重要なかわりがあると考えた判断を加えて話すことで、聞き手の子どもも複数の社会的な事象に関連してとらえられるようになる。その複数の事象に関連させてとらえたことを次の子どもが話すことで、集団で問題解決ができるようになっていくと考える。

子どもがつかんだ事象について話し合う中で、思いつかなかった関連に気付くことができる。他の子どもが、問題解決のために関連を見出して話す事象に納得したり、関連を見出せず疑問を感じたりする。疑問を含んだ発言を聞いた他の子どもが、関連を明確にするために図示したり、新たな事象を示して事前の事象を補足して説明したりする。それらの活動は、学級という学習集団が問題解決に向けてそれぞれの考えを発言する姿として表れる。

学習を経ることで、自らが知っていた複数の社会的な事象がそれぞれに意味のあるつながりをもってとらえられるようになる。それまでは個人が独立してとらえていた事象を、関連性をもった事象ととらえられるようになったことに喜びを感じ、自らの成長を感じることができる。自らのとらえを認識し、他の子どもに伝え、共に事象の関連を見出すなどして考えを深め合う。そして、その学習過程をふり返ることで自らの成長を感じられる授業をめざす。

3 「学ぶ楽しさを味わう授業」への手だて

(1) 問題意識をもち 事象の示す関連を明確にさせる

事象などから得た疑問を、学級集団で解決する価値ある学習問題へと昇華させていく。疑問を出し合い、既習を生かして学習問題へと言葉を精選していくことで、どの子どもも「解決したい。」と考える学習問題を作ることができる。

その問題を解決するためには事象の表す意味を様々な視点から考えたり、関連する事象同士をつなげて考えたりする。その際には、その事象について自分はどんな点が共通したり、異なったりしていると判断したかを明確にし、その判断も簡潔に話させるようにする。例えば「それは・・・だから。」「同じように・・・。」「前は・・・。」などと、根拠・並列の事象・過去との比較をして事象をとらえ、話させるのである。そうすることで、事象間の因果関係を見出したり、複数の事象を一つに括ってとらえたりすることができる。

(2) 資料の共有化によって 共に問題解決に向かわせる

観察や調査活動によって、子どもは学習問題についてもっていた予想を裏付ける事実を知ることができる。それらの事実は学級の子どもが共通に体験したものであったり、誰もがもつ資料に記されていたりする。問題解決に必要な根拠として、それぞれがとらえたことを語ることで、考えの共有・新たな事実の発見ができる。それは多くの子どもに大きな喜びを与えるものである。そのような学習活動が、自分が気付かなかったことに気付いた子どもを認める態度につながったり、より多くの気付きを知るために別の子の発言も「聞きたい」という意欲の向上につながったりすると考える。

学習では、語られる具体的事象や子どもがもった考え同士を、つながりをもったものにとらえられる記述をしていく。それぞれが知った事象を視点別に分類し記述させ、それらについてつながりなどを線でつないだり共通の色で書いたりする。これを学級全体や個人が展開することで、子どもがお互いの考えを理解しやすくなると考える。また、自分とのとらえの違いや新たにつながりを見出して発表することや、過去の関連する事象を思い出して話すことによって、数多くの事象が互いに関連性をもっていることに気付くことができる。

(3) 思考過程をふり返し 自らの変化を意識させる

学習が進むと、知り得たことを違う視点からとらえ直して考えられるようになっていたり、複数の視点から一つの事象をとらえて表現したりできるようになる。学習活動は事象から得た疑問に対して予想を立て、どのように社会活動が行われているか、どうしてそのように活動しているのかなどを調べ、問題解決をしていく。様々な疑問について自らが積極的に調査をしたり、学習集団が協力して事象の表す意味を考えたりすることで、はっきりしなかったことを自らも参加する集団学習で問題解決に至る思考過程を経験する。学習の終末に、課題に対するまとめの文章を書くことや、単元のまとめを作成する中に意図的に表現していくことで、その思考過程を認識できるようになるのである。これらの活動によって、自分を含む集団で得られる学びの深まりを体感できるようになる。

また、学習の途中で初めの考えや予想に、話し合いから気付いた事実を書き加えるなどして、常に学習の深まりを記録できるようにしていく。そうしていくことでも、子どもが自らの成長を自覚できると考える。

(1) 問題意識をもち 事象の示す関連を明確にさせる

「学校のまわりの様子」の実践から

観察・調査したことを紹介し合う活動を通して、長坂地区の様子を把握していく学習は、全員が参加できる活動の場であった。結果、多くの子が発言し、長坂地区の様子が明らかになるに連れて、新たな問題意識を生まれていった。

＜長坂地区の様子は＞が課題の授業では、クラス全体の問題意識の質を高めるために自由



資料1 発言を関連付けながら話したり聞いたりする様子

教師：（長坂地区を調査して）どんな様子が見られましたか？

A児：家が多いけど、人がいなくて、静かな町でした。

B児：信号があまりありませんでした。

C児：車通りが少なかったです。

教師：3年生らしい言葉で言うと？

C児：交通量が少ない。

D児：人が少なく、水の音が静かな中に流れていて、さわやかでした。

資料2 授業記録より 第1発問後

発言の形態をとった（資料1）。自由発言の良さは、子どもが、友達と重なる発言を控えたり、それぞれの発言の関連性について考えながら学習が進んだりすることだ。子どもは、発言したいタイミングで発言できるので、話し合いの流れを読みながら、自分の意思で発言をすることができる。結果、主体的かつ継続的に考えるので、思考や理解が深まりやすい。

では、実際を見てみる。授業記録（資料2）によると、「長坂地区にはどんな様子が見られましたか？」という発問に対して、A児は、「家が多い」という土地利用の様子だけでなく、「人がいなくて静か」という、五感を使って調べたことを発言した。それに対して、続くB児は、「信号があまりなかった」と発言した。A児とB児の発言に関連はあるのだろうか。

A児が長坂地区に多く見られたものについて発言をしたので、B児は「では、自分は、逆に少ないものについて話そう。」と

したのではないかと考えられる。二人目の発言であるので偶然とも考えられるが、日頃から、クラス内ではB児のように逆の視点から話そうという思考の発言が見られるので、その可能性が高い。

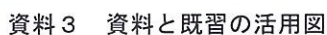
次に、C児は「車通りが少ない」と発言している。これは、B児の発言を受けて、少なかったものの視点で発言したのであろう。その後、D児は「人が少なかった。」と、少なかったものの話の流れを継承して発言している。少なかったシリーズの発言が続く中、D児は、「水の音が静かな中に流れていて爽やかだった。」と発言した。単に少なかったものについて発言するだけでなく、A児が発言した「静か」について重ねて述べ、耳から入ってきた「水の流れる音」の印象についても発言している。D児は、友達の発言した内容を聞きながら考え、自分の思いを加えて発言したのだと推察できる。

＜長坂地区の様子は＞という問題意識をもって観察・調査活動をすることによって、調査結果を報告し合う学習活動が自発的に進み、事象の示す関連が自然と明確になってきた。

発言が「多い」よりも、「少ない」に流れたのは、前時で報告した平和町地区と比べて、長坂地区の印象について、〇〇が多かったというよりも、〇〇が少なかったという印象が強く残っていたからであろう。

「金沢市の様子」の実践から

これまでの既習と資料を意識的に活用させるようにした。本単元だけでなく前単元の既習も含めて、以下に学習の流れと内容、活用される資料の関係を活用図として示す。



【活用図について】既習の全てが後に生きる資料になる

- ①前单元「学校のまわりの様子」で学んだ野田山は、全国的にも特別な場所であると分かった。続いて、金沢市の白地図に、実際の大きさを附属小学校を位置づけて、市内の様子について想像させ、金沢市の様子を知りたいという意欲と見学の見通しをもたせた。
- ②金沢市内見学をした。片町・香林坊はビルや店、人や交通量が多い〔中心部〕。金沢駅は地元の魅力に溢れる場所で、北陸新幹線効果で観光客が多く賑わっている〔金沢駅〕。大野は港町で、金沢港には船や倉庫が多く大きなガントリークレーンがある〔北西部〕。河北潟は、日本で二番目に広い干拓地であり、海拔2m以下の土地に蓮根や小麦栽培をし、酪農も盛んである〔北部〕。湯涌や横谷町は山地で温泉があり、金沢の奥座敷として、昔から親しまれてきた〔東部〕。
- ③金沢市内見学のふりかえりを書いた。
- ④金沢市内見学をふまえて、地形・土地利用の様子・交通の様子・主な公共施設・古くからの建物などについて、白地図作業に様子をまとめる作業をした。
- ⑤市内見学をした場所、見学はしなかったが、金沢の魅力ある場所について、家の人に聞き取りをしたり、自分で調べたりしたところの写真を集めた。
- ⑥金沢の魅力ある場所について、詳しく知りたい場合にインターネットで調べた。
- ⑦金沢の魅力ある場所について、市内のどの位置にあるのかを資料集の地図を見たりして調べ、「おすすめ金沢」に位置づけた。
- ⑧観光パンフレットなどを、金沢市の様子が分かるものを集めておき、「おすすめ金沢」を作る際の資料とした。

「おすすめ金沢」の活動は、2時間である。当初、北陸新幹線の人気が凄まじく、全員が金沢駅を紹介したい勢いであったが、「みんなが北陸新幹線のことを書けば金沢市のおすすめの場所の様子が全部わかる？」と、考えさせたところ、おすすめの場所を分担して書き、皆で「おすすめ金沢」を仕上げようとなった。

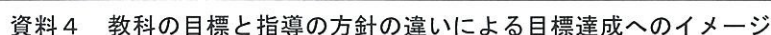
作業の早いE児は、1時間内に自分の分を仕上げ、次に何をしたらよいか教師に尋ねてきた。「何をすればよいと思う？」と、考えさせたところ、調べたり書いたりするのに苦労している子どもを手伝いたいとのことであった。「その考え、いいね！」と言うと、協力して調べたり、アドバイスし合ったりしながら、次々にパンフレットを仕上げていった。

それでも、2時間目の後半になると、することが無くなってきたF児は、教師に、「もうひとつおすすめしたい場所を書きたいがよいか。」と尋ねてきた。新しい場所だけでなく、既に他の子どもが書いている場所や場所ではなく行事なども書きたいと言うのであった。「おすすめ金沢」について考え、調べ続けていったとき、既習の地形や土地利用の様子などのとは別の視点をもったり広げたりして、自分の「おすすめ金沢」が生まれてきた。例えば、百万石祭りは金沢城について調べる過程で、前田利家が金沢城へ入城したことを祝う祭りを知って紹介したくなったし、灯籠流しは金沢を流れる浅野川について調べているうちにおすすめしたくなった。

「学び」は広がって当初の目的を越えていくのが健全である。大人でも目的があっても何かを調べていたら興味が膨らんで、当初の目的以外のことも調べていたり、さらには目的も変化したりする場合がある。興味が膨らんで意欲が高まったのに、当初の目的と異なるから、調べたり表現したりすることを禁止するというのは、仕事なら致し方ないが、妥当性がない。まして、3年生の子どもならば、なおさら発展的な学習を禁止する根拠が見つからない。E児やF児は、友達と共に問題解決に向かうことによって、自ら学びを広げた（資料4）。

既習と資料を存分に活用できるように環境づくりをすることによって、当初の目的を越える発展的な学びが始まった。子どもは広げた学びを重ね補い合って、学びを深めていた。よくよく考えれば、「既習の活用」とか、「子どもの身近な生活から問題解決学習につなげる」

「真に価値ある学びは、子どもの探究心に火を燈し、社会科のめざすものの見方や考え方を養うだけでなく、自ら公民的資質を養っていく」そのような学びをイメージしたい。



「金沢市の様子」の実践から

金沢市の中


名刺

いっしょに
金沢

今日、金沢市内見学へ行きました。さいしよは、金沢えきへ見学に行きました。先生がきていた。まいとさんがいました。くわいおきてくれて、いせつたなと思ひました。そのほかいろいろな場所で見学しました。けんち、うや、金沢、いっおみすがめおせん、大野の、海でおべんとをへべました。そは風がういて、気もちがよかったです。また、4年生でも色々な所、いろいろな場所で見学をしました。わたし、まいとさんのようにいせつなわさとい人になりました。

おすすめ金沢 3年1組3番()

ゆわく温泉



わたしのおすすめの場所は、ゆわく温泉です。ゆったりできて気持ちいです。とても温かくて、おすすめです。みんなのおすすめをひろびろして、気持ちのいいのでおすすめ金沢です。

資料5 自らの変化が見える活動（G県）

三つの手だてについては、上記のとおりに一定の成果は得られたものの、偶然の謗りを免れる為にも実践と検証を積み重ねる必要がある。(2)では、学習活動の工夫によって、押し付けなく、予想外に子どもの意欲的な姿を得ることになったが、本考察をさらに深め、実践と検証を重ねることが求められる。

(1) 問題意識をもち 事象の示す関連を明確にさせる

「低地のくらし」の実践から

単元の初めに子どもが話し合いをして、単元を通したいくつかの学習問題を作り、学習の見通しをもてるようにした。自分たちの疑問から学習問題を作ることができれば、「どうしてなのか、理由を知りたい」などと問題解決への意欲につながり、問題解決に向けて積極的に発言すると考えた。また、既習を参考にして「気候」「地形」といった社会的な視点から問題を考えることで、これ以降の学習でも同様の活動で問題を考えられるようにした。

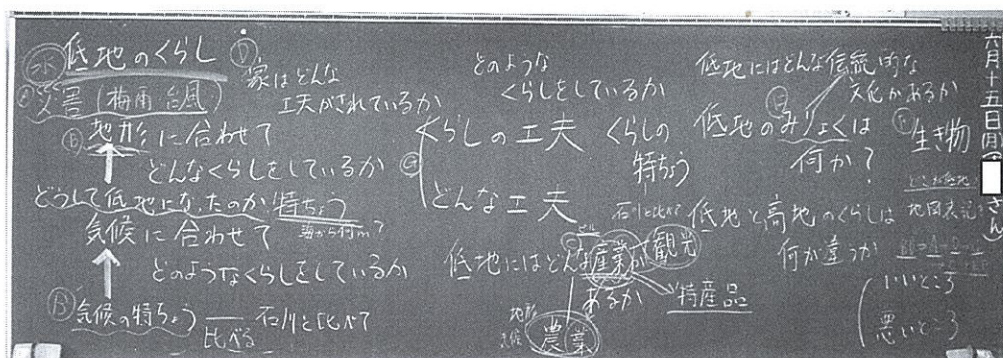
学習ではより多くの発言機会を得られるよう四人（または五人）グループでの話し合い形態をとった。また、より多く出た意見を記録し、言葉の吟味をしたり、関連する事実を一つにまとめたりできるように記録紙を持たせて活動した。

この学習で子どもが考えるよりどころとしたのは、既習内容が書かれたノートである。子どもは、それを参考にしながら話し合いを進めた。ノートには、前単元のあたたかい地方のくらしの学習の記録があり、地形や気候の特徴・気候に合わせたくらしや、気候に合わせた農業や産業などについて書かれている。これらの学習をふり返ることで、人びとのくらしはどんな社会的事象とつながりをもっているのか考えられる。そして、学習問題となった疑問を授業で解決していくのだが、その際に視点別に黒板で整理することで、「気候」「地形」「産業」など社会的視点を表す用語の理解につなげようと企図した。

子どもから出された疑問は、概ね先のあたたかい地方の学習内容に近いものであった。「どうして低地になったのか」という疑問が出され、それに関連するものとして「地形に合わせてどんなくらしをしているか」「気候に合わせてどのようなくらしをしているか」などが出された。それらを、「どうして低地になったのか・地形的特徴は何か」を「地形に合わせてどのようなくらしをしているか」、「気候の特徴」を「気候にあわせてどのようなくらしをしているか」などとまとめていった。そして、そのまとめたものをキーワードとしてとらえ、学習

の順番を決めていった（資料 1）。

初めの学習はどのような地形的特色があるのか調べていくものであった。その後、低地なのだから水の災害が



資料 1 板書で疑問を整理し 単元の学習の見通しをもたせる

多いのではないかと考え、災害の学習をしていくなどと決めていった。続くのはあたたかい地方の学習と同様に、家の工夫であり、そこからくらしの工夫などを学習しようと進めていった。このようにして、単元全体を見通しをもって学習ができるようにした。また、こうやって学習問題を作っていくことで、細かな言葉の表現を忘れてしまっても、学習内容を端的に表すキーワードは確実に記憶できる。そして、毎時間初めの話し合いによってその時間の学習問題を確認し、学習の目的を明確にした授業をすることができた。

「低地のくらし」の実践から

この授業では、低地の気候や地形的特色と、それらに関連した農業や産業の様子つかむことを目的とした。単元を通した学習の流れを事前に決めたが、本時で多くの子どもが積極的

に授業に臨み、話し合いにより考えを深められるようにするには、どのような学習問題を作ればよいか話し合いをさせた。その際、教師からは短く限定した言葉かけのみを行った。問題に入れる言葉のもつ意味を吟味し、学習の視点が定まるようにねらったからである（資料2）。

子どもは本単元の学習以前にあたたかい地方での気候を生かしたくらしの学習をしている。だから、A児の発言には低地でも同様に地形を生かして農業などを行っているのだらうという予想があると考えられる。その後のB児・C児の発言には、「どんな」という言葉が見られる。この言葉は問題作りの際に、学級で大事にしているものである。問題に「どんな」という言葉を入れることで、まとめて具体的な事実や姿を書くことができる。具体的な事実などはイメージしやすく、その時間の学びの確実な定着につながると考える。だから、多くの問題にこの言葉を入れるように指導をしている。

資料2のB児・C児の発言から、この授業の大きな流れが生まれたと考える。そこで、この2人の発言の違いに着目させることにより、何を調べまとめていくかを明確にできるよう「少し、違う。」と

声をかけた。産業には農業が含まれるのが一般的な解釈である。だから、別々にも学習できるのだが、地形を視点とするならば、農業を大きく扱うにしても複数の産業を同時に学習する必要性があると考えたのである。直後の二度目のB児の発言は、A児の発言の意図も加えたものである。「地形を生かす」という言葉が「地形に合わせて」と表現が変わっているが、同じように地形的特徴と関連させたものだとする。B児やその後のD児の発言に対して、教師が反応を返すことで、学習の視点を明確にできた。同時に子どもの発言を認め、次の発言の意欲につながると考える。この時、長い言葉をかけ過ぎると、子どもの発言の連続を妨げてしまう。だから、短く切り返される教師の発言から「何か、不足がありそう。こんなのはどうかな。」「よくなったようだ。」などと子どもが短時間に判断し、次の発言が続くようにした。

その後、三度目のB児の発言で学習問題が決定している。前単元や前時の地形の学習とのかかわりを考えつつ、資料中の農業や産業の様子をとらえていくように学習を進めるようにしている。

(2) 資料の共有化によって ともに問題解決に向かわせる

「低地のくらし」の実践から

授業ではマッピング形式での記述を行っている。子どもが問題解決のために調べ活動を行い、そこで知ったことをノートに記録する際にも、学級全体で調べたことや考えたことを板書する際にもマッピング形式で行う。そうすることで、つながりを示す言葉を際立たせることができ、そのつながりから関連する事象を見出したり、生活経験から思い出したりすることができる。

教師：今日の課題は？

A児：＜低地では、地形をどう生かしているか＞です。

B児：＜海津市では、どんな農業をしているか＞がいいと思います。

C児：＜低地では、どんな産業をしているか＞がいいと思います。

教師：少し、違う。

B児：少し変えるんですけど、地形に合わせて農業をしていると思います。だから＜地形に合わせてどんな農業をしているか＞がいいと思います。

教師：うーん。

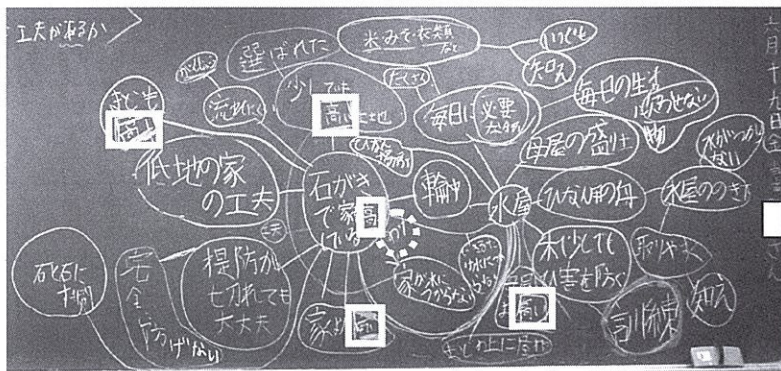
D児：B児に少し似ているんですけど、C児ののと合わせて＜地形に合わせてどんな農業や産業をしているか＞がいいと思います。

教師：なるほど。

B児：じゃあD児の言ったく地形に合わせてどんな農業や産業をしているか＞でいいですか。

全体：はい。

資料2 言葉を吟味して課題を決定した話し合い



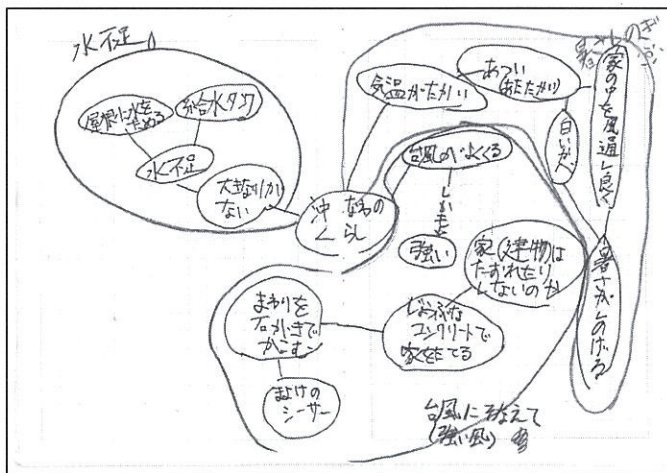
左の板書は子どもによるものである（資料3）。言葉を書き記しながら、共通する言葉が目立つようにしている。例えば、発言によく出た「高い」という言葉を赤色で囲っている（資料3中の□部分）。そうすることで多くの子どもの発言から出た「高い」という言葉が、学習問題の「住民

の安全を守るための工夫」には、重要なキーワードであると認識することができる。

また、中央あたりに書いてある「石がきで家を高くしている」と「家が水につからない」は、「わけ」という言葉でつながられている（資料３中の破線○部分）。発言の根拠を明確にし、記録する言葉である。このようにして事象と事象を関連づけたり、その根拠を示して記録したりすることで、互いの関連性を見出していくことができるようになっていった。

「あたたかい地方の暮らし」の実践から

板書でのマッピング形式の記述と同様に、子どものノート記録もマッピング形式で行わせている。初めに調べたことを鉛筆で書き



ている。初めに調べたことを鉛筆で書き記し、その後板書と同じように関連するものをつないだり、囲ったりするのだが、ノートでは色鉛筆を使った色分けや「だから」「なぜ」などという根拠などを示す言葉を書き記すこともしている。

左は、沖縄県のくらしについて学習した時のノートである（資料4）。中央部に「沖なわのくらし」と書き、そこから関連する事実を資料から見つけていった。この時の資料は教科書と資料集、地図帳である。調べたことや学級全体での学習を経て、「水不足（に関する事実）」「暑さしのぎ（に関する事実）」など関連すると考えた複数の事実を囲っている。このようにすることで、事実を包括する言葉で理解ができ、学習問題に対するまとめに書くべきキーワードとして用いることができる。また、同じ視点からとらえたことを、他の子どもの考えに続いて自分の考えを「似ています。」「〇〇さんに付け加えて・・・。」などと続けて積極的に発言することにもつながり、話し合いを中心とした学習に効果があったと考える。



左は沖縄県の農業を学習したときの子どものノートである（資料5）。資料4と

同じように農業で注目すべきものとして「さとうきび」「菊」の2つに大きく括っている。その中を詳しく見ると、右側のページに「12月～5月のほとんどをしめる」から「冬にさかん」

